



Title	＜書評＞寺町晋哉『＜教師の人生＞と向き合うジェンダー教育実践』初版、晃洋書房、2021年、214頁、定価2,750円
Author(s)	山口, 真美
Citation	未来共創. 2022, 9, p. 318-320
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88561
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

寺町晋哉

『〈教師の人生〉と向き合うジェンダー教育実践』

初版、晃洋書房、2021年、214頁、定価2,750円

山口 真美

だから教師は、そして教師研究はおもしろいと思われた一冊だった。本書において教師は〈教師〉とも表記され、そこには教師を「個人として様々な経験を重ねた一人の人間」(p. v) として見るという筆者の姿勢が示されている。本書は、大阪大学人間科学研究科に提出された筆者の博士論文をもとにした一冊である。評者はジェンダーと教育の専門ではないが、同じく教師研究を志している後輩として本書を取り上げたい。

各章について簡単に概要を述べていこう。まず、1章では、ジェンダーをめぐる教育課題について種々の統計データを用いながら解説がなされる。その後、教師は再生産の担い手か、それとも変革の担い手かという刺激的な問いが先行研究とともに提起される。困難に直面しながらも後者を目指す際に、特に有効なアプローチとしてクリティカル・ペダゴジーとフェミニスト・ペダゴジーが紹介され、さらに現実的な方法としてジェンダー・センシティブな視点が挙げられる。本章の最後に述べられる、ジェンダー教育実践の布置を表した類型化の図(p.27)は、最終章と共に本書を見通す上で欠かせない。

続く2章「教師教育は「変革の担い手」育成に寄与しているか」は、教職課

程を履修する学生への質問紙調査を通して、教職課程でジェンダーに関する内容を学習する機会がどの程度あり、知識や視点をどの程度獲得しているのかという実態を把握する試みである。カリキュラムに無いがゆえに把握が難しい部分に関して、貴重なデータがわかりやすくまとめられており、今後のジェンダー教育実践への視座に必須のパートである。

3章から6章は、具体的な事例を通して研究成果で、臨場感のあるデータ、的確な考察はいずれも読みごたえ十分である。ユニークなタイトルの「女子のトラブルを「ドロドロしたもの」と見なしてしまう文脈」(3章)は、子どもの実態と指導ベースの話で、特に現場の教師たちにとって魅力的な章のひとつなのではないかと思う。今回の事例では、教師たちは意図せずジェンダー秩序の再生産の担い手になってしまう様子が描かれるが、筆者は教師たちを批判するのではなく、置かれている文脈への注視を促す。「〈教師〉であることとジェンダー教育実践」(4章)と「〈教師〉集団だからできること／難しいこと」(5章)は、本書の核となる部分で、「一人の人間であり、その人の人生がある」(p. iv) 〈教師〉がいかに現場で教育実践を行うか、そしてなぜそれが難し

いのかインタビューデータに基づいて鮮明に描き出されている。他の教育実践（多文化教育や同和・人権教育など）に敷衍することには禁欲的でなければならないが、一方で共通する部分や参考にすべき点は多く、最も広く読まれるべき論考である。

6章では、研究者である筆者がフィールドワークを通して出会った〈教師〉たちと、ジェンダー教育実践を作りあげた軌跡が詳述される。評者もフィールドワークを始めて長くなるがこのような協働的取り組みには至っておらず、力量不足を痛感する。ただ、研究者と実践者の出会いが新たな実践の創出に結びつくかは、様々な偶然に左右される。これは筆者に倣えば、研究者も〈研究者〉であることを示しており、その面白さが詰まった章である。最終の7章「〈教師〉の人生と向き合う」では、本書のまとめとともに、〈教師の人生〉に向き合うことこそが、現在蓄積されているジェンダー教育実践をさらに広め、ジェンダー秩序の変革につながるだろうという希望が述べられる。また、付言すべきはコラムの存在である。博論本でコラムが入っているのをあまり見たことがなかったのだが、現場の教師や幅広い読者層への細やかな心遣いを感じる部分である。

本書は、一見良いと思われるような取り組み（ジェンダー教育実践）がなぜ広がらなかったり実施が難しかったりするののかという課題に対して、教師が〈教師〉であることを認識するという、当然のことながら研究上で看過されがちな観点を中心に据えて、〈教師〉たちの機微を描き出して、説明に取り組んだ労作である。教育社会学の教師研究で明らかにされてきた教師＝再生産の担い手という点を、糾弾するわけではなく、かといって反例を挙げて擁護をしようとするのではなく、理念と実情の双方に目を配って記述し、理解を促すという回路が拓かれたように思われる。〈教師〉が「一人の人間であり、その人の人生がある」という観点は、ライフヒストリー研究に限らず、AIが興隆する時代において「人が人に教える」という教育的営みの意味を考える教育学全般にとって重要なものとなるだろう。

無いものねだりを承知の上で述べると、ジェンダー教育実践を行ううえでの困難のひとつである、〈教師〉に対する学校外の社会からの影響についてのさらなる示唆を求めたい。例えば、過去の男女平等教育研究指定校での取り組み事例（多賀 2016）では、実践がうまくいかなかった部分のジレンマのひとつとして子どもたちの「家族」が挙げられている。保護

者が従来のジェンダー規範を内面化していたり、実際の家庭内役割が理念と食い違ったりすることで、子どもが混乱してしまったという。ジェンダー教育実践に携わるなかで「変わらない外部社会」を少しでも変えていくために、〈教師〉は自身の価値観を見つめ直しつつ、子どもたちに対して教育を行っていく。しかし、〈教師〉同様、子どもたちは家庭や地域社会という学校外の社会を生きる存在でもあり、学校公教育内での完結は見られない。また、6章の授業づくりの話合いにおいて、教師の価値観や生活スタイルが引きずり出される場面が描かれていたが、教師が〈教師〉であることによる困難は、授業以外の場でも経験する可能性がある。例えば、教師の仕事として割合は少ないとはいえ「変わりづらい外部社会」、具体的には学校よりは保守的と想定される家庭や地域と関わることもある。そのとき〈教師〉は、何を思うのだろうか。あるいは「大人」の話なので何も思わないのだろうか。評者が学校で観察していると、教師は特に子どもへの接し方・声かけにおいてジェンダーにセンシティブな姿勢を取ろうとしているが、やはり家庭に連絡するとなるとまず母親で、母親が機能しない場合に父親にアプローチしてみる、という対応が一般的である。

ただし、この場合も家庭の側が連絡先として母親を希望する、そして大勢がそのような選択をする社会構造が背後に控えるなど、教師が働きかけづらい部分であることは容易に想像ができる。ジェンダーと無関係ではいられない社会の一部である学校・教師の、変革への模索と挑戦は続いていく。

参考文献

多賀太

2016 『男子問題の時代?』学文社。